息子からのメール

中央区・清滝支部
(小田原病院)　**小田原良治**

息子からのメールに写真が添付してあった。写真を送って来るとは珍しいこともあるものである。東大医学部時代の同級生3人で北海道の洞爺湖に遊びに行っていたのだ。3人で北海道に行ったと書いたが，厳密にいうと，1人が今，北海道大学に勤務しているので，東京から息子と友人の2人が札幌に行き，3人で洞爺湖に遊びに行ったようである。仕事の合間に急に決まった話らしい。独身の気楽さである。卒後研修のマッチングの病院見学を口実に，あちこち旅行して回った仲間であり，鹿児島にもやって来た。「鹿児島は豚ばかりですね」というので，寿司屋に連れて行ったところ，「美味しい，美味しい」とよろこんでいた学生だが，立派な医師となり，第一線で活躍している。束の間の休暇を豪遊して来たようである。考えてみれば，息子も30を過ぎたのだ。

学生時代の遊び仲間との時間は楽しそうである。「えぞ富士」と呼ばれる羊蹄山，洞爺湖に浮かぶ中島，晴れ渡ってきれいな写真だった。SUP (スタンドアップパドル・サーフィン) の息子の写真の髪を見ると転落したのは見え見えである。筆者が突っ込みを入れると，「湖は静かだし，水深浅いし，ライフジャケット着けてるし」と防戦を張って来た。ヤバそうな話は，事前に話さず，事後報告にする。いつの時代も，考えることは同じである。

昔の遊び仲間を考えると，豊平 均君の顔が目に浮かぶ。既に，鬼籍に入ってしまったが，豊平 均君はいい遊び仲間であった。よく一緒に遊びに行った。高千穂にも登ったし，よく飲んで回った。彼とは一外科，二外科と医局を異にしたが，医局時代は動物実験舎でよく一緒になって，油を売っていた。彼の現世の最後のひと時を共に仕事する機会も得た。遊び仲間とは妙な安心感のあるものである。息子から送られてきた写真を見て，昔のことが懐かしく，思わず笑ってしまった。

息子は，筆者が40の時の子で，末っ子の長男である。東大病院の消化器内科にいるが，帰りはいつも夜中12時頃である。最近は，東京に行っても忙しくてなかなか会う機会がない。東大卒業後，厚生年金病院で臨床研修をしていたが，当時，医療事故調査制度論議の真っただ中であった。気持ちとしては同じ道に進んでほしいとの思いもあったが，不透明な状況のなか，外科に入局するのは止めるように忠告した。それでも消化器内科を選んでくれたことにはうれしい思いがある。同時に，筆者が死ぬ思いで頑張った結果が，息子たち若い医師に貢献できたことはささやかな喜びでもある。医療事故調査制度がこのようにいい形で着地できると分かっていれば外科でもよかったかなとの思いがないでもないが，またしても起こって来た最近の不穏な動きをみると，やはりいい選択であったかなと思わざるを得ない。種々の圧力に屈しないよう，次の世代にも頑張ってほしいものである。

息子の生活を見ていれば，東大の消化器内科も旧態依然としているようだ。かつての筆者らの生活と変わりがない。働き方改革とは縁遠いようである。もっとも，医師としてのスキルアップを考えれば必要な部分でもあるが，両者をはっきりと区別して行く時代になったということであろう。

忙しい中で，寸暇を見つけての遊び，授業をちょっとサボって飲みに行くコーヒー，こ

れが楽しい。遊びはそれぞれが，詰まった時間の合間に探り出すところに宝石の価値がある。息子と元悪がきどもの写真は生き生きとしていた。洞爺湖と言えば，有珠山，昭和新山のイメージしかなかった。麦畑から突然，噴火が起こり，山ができ上がったという話も，令和の今日，遠い昔話ということである。「明治は歴史になりにけり」「昭和も遠くなりにけり」ということであろう。二人だけの食卓で，「そのうち，洞爺湖に行ってみようよ」という夫婦の貴重な会話があった。